「逸聞」において報じられる戦争－日露戦争新聞報道における「戦死者家族訪問記」の「語り」が意味するもの－

加藤　裕治

1　はじめに～もう一つのメディア史

戦時の大阪毎日新聞！！！
我大阪毎日新聞は實に他に誇るべき多くの陸海軍従軍者とまた清韓各地に多くの通信員を配置し多大の費用を吝まず至急電報若くは通信を以て急報せしむ今後海陸両方面に渡る大々的活劇の演ぜらるゝに當りそを最も迅速詳細に報道するが如き實にすべての機關整頓し戦時通信費の如きも數萬圓を抛つの覚悟を有せるわが毎日新聞の如きものにあらざれば能はざる所なり（大阪朝日新聞 M37/2/26 広告欄）

日露戦争時におけるこの新聞広告は、その当時の新聞が自らの商品価値として喧伝する部分を、的確に捉えたものだといえるだろう。「天下国家論」よりも「戦地の実況報道」が読者に歓迎されるのだ。『朝日新聞』や『時事新報』等は大規模な取材通信網を成立させ、『大阪毎日新聞』は明治37年中に498回の号外を出し、さらに戦場実況を試みるための無線報道が現れる。戦場の情報を新聞読者へと伝えようとする新聞の試みは、新聞そのもののメディアとしての役割を変化させるまでになっていたのである。

「報道の内容が詳細になり、記者の感性が重視されるようになった。日露戦争後新聞社の社会部の地位が向上し、比重が大きくなったが、それはこの戦争報道に負うところがおおい。その意味で日露戦争は、日本の近代ジャーナリズムへの大きなスプリング・ボードであったとみることができるであろう。」（茶本1984:118）戦争とジャーナリズムの関係を論じた茶本繁正は、日露戦争の報道のそうした加熱ぶりをこのように評したのである。

それに対して、こうした戦争報道に熱狂する新聞は「ナショナリズムとメディア」の観点からメディアを捉える「史」において、逆に「新聞の無力」（鈴木1997）の時代として捉えられることになる。政論を中心とした大新聞が持っていた批判機能を失い、報道を重視する大衆的な新聞が台頭することで、新聞はナショナリズムと結託していったのだと論じられるわけだ。だがこうした既存のメディア史からの指摘は、「公論機能」を新聞の第一の機能とする前提を強調しすぎるあまり、茶本が指摘するような当時の報道新聞そのものへの考察をあまりにも欠落させてきたのである。そのために、この時代の報道新聞に関する研究は既存のメディア史において余りに少ない。

「今後海陸両方面に渡る大々的活劇の演ぜらるるに當りそを最も迅速詳細に報道する」。冒頭の広告は、メディア倫理の視点から見た限り、戦意高揚以外のなにものでもない表現であるかもしれない。だが新聞による戦争報道が、「大々的活劇」なる表現を生み出すような熱狂的受容のなかにあり、それが当時の新聞の商品価値として喧伝されているのならば、問われるのは、熱狂的に受容された報道新聞－それをスペクタクル的受容の成立と呼んでしまうこともできるのだが－が、どのように戦争を報じたのか、ということになるだろう。

成田龍一はある著作のなかで、さまざまなメディアにおける「戦争の語り」の多層性に注目している（成田2001）。成田によれば、そうしたメディアは多様な文体や視点をとることで、戦争へのそれぞれ固

有の「語り」を作動させているという。新聞報道による戦争の「語り」もまた、その例外ではないとすれば、この時代において新聞メディア固有の「語り」は、どのように戦争を報じるものとして現れていたのか。本論は「大々的活劇」と喧伝して戦争を報道してしまう当時の新聞に現れていた、「語り」の多層性が意味するものを論じる試みである。

2　戦争の「事実」を模索する新聞

戦争を「大々的活劇」として報じることを宣言した先の報道新聞の広告が「陸海軍従軍者とまた清韓各地に多くの通信員」を配置し、「戦時通信費」の多さをその自らの商品価値として喧伝していたことからもわかるように、この時期の新聞報道にはその情報伝達の迅速さに加え、「確実さ」や「事実性」が盛んに求められるようになっていた。だが、こうした新聞報道の当然と考えられる規範は、明治30年代までそれほど自明なものではなかった。

北原糸子は明治20年代前半における災害報道に言及し、災害を報じる際、現地に特派員を送るものもあれば、そうでない新聞社もあり、当時の新聞報道がまだ「共通の取材スタイル」を確定させていなかったことを論じている(北原1998:62-73)。「現地」からの取材という新聞報道に固有のスタイルさえも制度化されていなかったことを示す一例といえよう。

また拙稿で論じたことがあるが、この明治20年代前後には新聞に関する一つの論争＝メタ言説が生じていた(加藤2000:97-108)。そこで問題になったのは、例えば『東京絵入新聞』で疎影閑人が評したように「事実を新聞紙上に報道するの責任を負いながら」も「稗史小説」のような記事を掲載していることは「不見識」であると指摘するものであった。こうした新聞に関する評論＝メタ言説は、新聞で出来事を報じることが、虚構/事実（報道）の差異にあることが把握されながらも、新聞が報じるべき「事実(らしさ)」がどのように提示されるかが問題になっていたことを示している。明治20年におきた殺人事件―花井お梅の事件―報道では、その虚構的つづき物で語られていた事件を「事実」中心として報じようとするために、殺人事件として報じられるべき出来事としてのまとまりがつかなくなり、新聞連載が中断に追い込まれてしまう“事件”が生じていた。新聞が報じるべき「事実」を、どのような「語り」のなかで構成するのかという新聞としての技法が、そこでは問題になっていたのである。新聞における「事実」も、単なる「事実」ではなく、何らかの「語り」の技法を持たなければ「事実」として成立しない。この後も新聞報道は、「事実」をめぐるさまざまな「語り」のせめぎあいの中で展開していったのである。

明治30年の『万朝報』における「大石正巳姦通事件」を例にして紅野謙介は、その一連の事件報道が「特定の言い回し(口語調の手紙文)」「活字の大きさという視覚的操作」「肖像写真」などのさまざまな技法によって、いかにして大石正巳のスキャンダルに「事実(らしさ)」のリアリティを与えていったのかということを論じている(紅野1997:21-49)。「迅速確実の報道」といったような客観報道的理念が既に標榜され始めていたこの時代、紙面上では実際の出来事を「事実(らしさ)」をもって報じるということへの模索が続いていたのである。それは戦争報道においても同様であった。「しかし一口に戦争報道といっても、それはいったいどのような言説なのだろうか。実はそこには、レヴェルを異にする、いくつかの言説が重層的に交錯しているのである。」(小森1994:54)日露戦争における新聞もまた、このように語られるのだとしたら、「事実」をめぐるさまざまな「語り」をより詳細に論じていく必要があるだろう。これはまた、その当時の新聞が戦争という出来事に、どのような「かたち」を与えて報じようとしたのか、ということを知ることにもなるはずである。

3　戦争という出来事を「まとめる」三つの「語り」

日露戦争時に「報道新聞の雄として台頭」した『朝日新聞』、とりわけ『大阪朝日新聞』を主にとりあげながら、戦争報道の「語り」を見ていくことにしたい。特に、「名」としての戦場を捉えていく技法、決定的瞬間を捉えるものとして現れた技法、そして経歴として戦死者を捉える技法、の三点に着目することによって、その当時の新聞報道が、戦争という出来事をどのような「事実」から報じようとしたのか、ということの一端が明らかになるはずだ。これはまた新聞の「語り」によって、戦争という出来事が「まとめあげ」られ、報じられる過程を見ていくことにもなるはずである。(以後、特に言及がない場合、新聞の引用は大阪朝日新聞からのものである。また新聞の日付はM(明治)年/月/日と表記する)

3-1「名」としての「戦場」

紅野謙介はこの時代の新聞をとりあげ「戦争報道はとりわけ名の氾濫する言説を構成した」と論じている(紅野2003:127)。戦争の開戦前は内外の政治家、外交官、軍人の「名」が中心として報じられたのであったが、開戦前後から新聞社が各地に展開した通信地「倫敦」「伯林」「上海」「北京」などの地名、また開戦後は「仁川」「旅順」などの朝鮮半島の地名が新聞紙面に頻出することになったという。

例えば開戦報道直後の紙面(M37/2/13)には、「東

京電報」「伯林電報」「韓京電報」「釜山電報」「長崎電報」「門司電報」「各地電報」といった各地の「名」が挙げられ、その電信発信先から到着する情報が列挙されている。そしてその各地からの情報の内容もまた、「名」の列挙として報じられる。「●露艦来襲情報」が「函館」から、「津軽」から、また「全勝丸」という船名の船長から告げられるのである。この「名」の提示は一後に述べるように一「戦死者」軍人の「名」へと拡張されていくだろう。ともかく戦争報道において新聞は日常の報道以上に、「名」を強調するメディアとして現れていたのである。

さまざまな「地名」や「人名」の羅列は、「名」という最小限の「事実情報」が、戦争という出来事に関わっていることを強調する効果を与えていく。つまりそれらの「名」は単に「事実情報」として提示されているというだけでなく、戦争そのものの拡がりをイメージさせるものとして現れている。「名」は戦場を「面」としての拡がりを持つものとして認識させる効果を持つのである。

さらに、こうした「名」と同様の機能を、より視覚的に補完するメディアとして地図を挙げることができるだろう。新聞紙面に挿入される地図は、かなり精密な地勢図もあれば、鳥瞰図的なものもあるのだが、単に場所の「名」をコトバで示すだけでなく、さまざまな視覚記号を通して「戦場」を想起させるメディアとして機能する。

例えば開戦直前の新聞には「旅順附近形勢圖」なる地形図が掲載されている。それは単なる地形図ではなく、その地図の中に旅順の各地名、さらには砲台、電信局、電線、大道路、小道路、鉄道、望遠台の位置が細かく記載され、さらに次のような註釈が付けられていた。

旅順口防備に關する圖説は已に去る七日の紙上に掲載したるが茲に掲ぐるは別方面より得たる旅順附近の形勢を示したる者なり原圖は露國近年の測量に係り多年彼地に在りし某氏が其親しく踏査せる所を我が軍人が調査したる材料とを綜合して圖上に既成未成の砲臺を書加へたる者なればかの防備圖と参照するに最も適當なる者なり(M37/2/11)

地勢図の上に描かれた軍事上重要とも考えられる諸施設の記号は、「何某氏」「軍人」という匿名でありながらその情報源としての信憑性があるとされた人物からの目撃＝調査のもとに、空想でもなく推察でもない、あたかも確実な情報であるかのように受け手の前に差し出される。このように情報の出自を明らかにすることこそ、当時の新聞が重視した「事実(らしさ)」を産み出す技法として定着させていった「語り」であった。その情報源＝出自への言及が「地図」への信頼性を構築する。新聞の受け手はこうしたさまざまな調査を経たかのように言及される地図を通して、ある種の軍事戦略的(であるかのよう)な視点から戦場を想起していくことを、戦争の「語り」として受け取る位置を与えられることになる。

逆に言えば新聞とは、そうした軍事戦略的な位置から地名と地勢と状況を報じる地図こそが、戦争を知る上での重要な装置である(かのような)ものと受け手に認識させることになる。これは新聞メディアに媒介されて現れる「名」と「地形」によって戦争を捉えることが、戦争の重要な「事実」であることを自明視するような「語り」の制度の登場を意味するものでもあった。

3-2　決定的瞬間としての戦場

開戦当初の連合艦隊における旅順港外露西亜艦攻撃の際に、新聞が繰り返し艦船の「爆発」「沈没」の瞬間を報じようと試みたように、新聞報道は戦争が数多くの決定的瞬間の場に満ちているかのような「語り」を反復する。「名」の羅列が「俯瞰的」な視点から見る戦争を想起させるような「語り」であったことに対し、決定的瞬間として戦場を捉える「語り」は、戦争を「点」として想起させるものであったといってもよいかもしれない。こうした「語り」が及ぼす効果について、軍略地点の陥落・占領の瞬間、艦船の沈没といった二つの具体例から論じていくことにしたい。

3-2-1　軍略地点の陥落・占領の瞬間

開戦直後から「拠点の陥落」「拠点の占領」という記事が新聞上に頻出する。地名としての「名」そのものが一つの軍事的な目標であるかのように新聞で報じられることで、その「陥落」こそが、戦争を報じる際の重要な「事実情報」であるかのように現れてくる。

例えば会戦当初から(実際には陥落していないのだが)「旅順陥落」(M37/3/14)の見出しを持った記事が現れている。その後も「第＃回旅順攻撃」「第＃回旅順総攻撃」という見出しが紙面を埋めていくのだが、その繰り返しの報道は、単に虚報や誤認というよりも、「旅順」と「陥落」が結び付けられ、その「陥落」こそが戦局的にも報道記事としても重要な瞬間であるかのような意味を、その反復ゆえに生じさせていたのである。またそうした連続した報道記事でなくとも、例えば「定州占領」(M37/3/29号外)や「門司電報　分水嶺占領詳報」(M37/7/14)、「歪頭山の攻撃占領」(M37/11/10)、といった見出しからもわかるように、さまざまな拠点を「陥落」「占領」した瞬間が意味あるものとして強調され、その各地点の占領へと向かう戦闘過程も、最終的な「陥落」「占領」へと繋がるゆえに価値あるものとして新聞の受け手に報じられていったのである。

しかし、こうした地点の陥落・占領報道そのもの

が、実は新聞報道的な「事実」の捉え方であることを、成田は1930年代の戦争の語りに対する探求のなかで論じている(成田 2001：131-3)。成田によれば「軍事」の側の「語り」ならば、戦況について「ある地点にいる敵の殲滅」こそが軍事上の目的となるのであって、実際の戦闘は、その敵の殲滅への小規模な戦闘の積み重ねであるという視点として成立するのだという。それに対して新聞報道は「大きな地点」をニュース価値としてしまい、「遂に＃＃を占領」という叙述こそを意味あるものにしてしまう。特に典型的なのはその当時の新聞上に数多く掲載された従軍記である。それは進軍に従軍しながら、ある地点の「占領」をゴールとするように記述が進み、その占領の瞬間を目撃することを第一の価値とすることに貫かれている。

この日露戦争での報道は、まさにそうした1930年代の戦争報道そのものを先取りするかのような事例といってよいだろう。こうした新聞報道は、拠点の「陥落」「占領」をゴールのようにして戦争を想起する視点を作り出す。またそれは逆に、こうした地点の「陥落」の瞬間を報じることが「戦場／戦争」報道にとって意味あるものだとする価値の出現を意味しているのである。

3-2-2　「爆發」「破壊沈没」「轟沈」の瞬間

陸戦であれば戦闘場面の報道は、上述したように「陥落」の瞬間を目的とする視点によって報道がなされていったのだが、海戦では船舶・艦船の沈没の瞬間そのものを提示する報道が行われていた。「爆發」「破壊沈没」「轟沈」の瞬間こそが海戦報道の目的地点とされ、新聞はその瞬間を目撃したことを執拗に報じていく。例えば下記の公報からの転用記事は、先に述べた地図の信憑性と同じように、この情報の発信元に関する執拗な言及を行うことで、この戦況報告の「事実(らしさ)」を強調する効果をもたらしながら、「爆發」「破壊沈没」「轟沈」の瞬間こそが、一つの戦場(報道)の帰結であるかのような報道をする。

●仁川の会戦公報　二月十日午前零時十五分仁川發三時十五分東京着九日午後仁川港第二艦隊旗艦浪速にて司令官瓜生少將發海軍大臣宛
九日正午露艦ヴァリヤーグ及びコレーツ仁川より出で來る我艦隊之を八尾島以西に邀擊す砲戦三十五分の後彼は仁川港に退却せり午後四時三十分コレーツは爆發し其後ヴァリヤーグ及び露國汽船ズンガリーも破壊沈没せり我艦隊は一の死傷者なく艦隊も損害なし軍氣大に振ふ(M37/2/10号外)

主に海戦における「爆發」「破壊沈没」「轟沈」の瞬間は、さらに画や写真によって盛んに報じられていく。だが、画報や当時の最新印刷技術による写真挿入による「爆發」の報道は、その爆発の瞬間を強調しすぎるがゆえに、その爆発までの海戦の過程や、その戦場の軍事上の意義などを報じるより、むしろ爆発そのものに関心を寄せる報道になってしまう。「仁川海戦露艦コレーツ爆破の瞬間　米人某の写真に拠る」(M27/2/22)との注釈がついた画報は、10日に報じられた「コレーツ爆破」記事から12日ほどたった新聞紙面に、唐突に付随する記事もなく、ただ上記の注釈だけと共に掲載される。

また写真掲載を可能にしていた新聞『報知新聞』は、2月21日付けの紙面に「コレーツの爆発　二月九日午后四時十分写　特派員画報　韓國特派員　小杉國太郎」の注釈のみの爆発の瞬間画を唐突に掲載する。さらに2月27日付け紙面では同じ海戦に参加した露艦ワリヤグの沈没が「眞景」と銘打たれた写真によって掲載される。「露艦ワリヤグ仁川港頭に轟沈せらるる眞景　韓國特派員　小杉國太郎」の見出しと共に「本図は沈没前の瞬間我が特派員の撮影せる者にして・・・」と、もはや戦闘の過程や意味とは無関係に、その爆発・沈没の瞬間を目撃したということを強調し、そしてその爆発そのものを報じることのみに価値があるかのような記事が現れる。

こうした瞬間の報道自体が、報道価値を持つものとして形作られていく。「物語」や「意味」が必要なのではなく、単に瞬間を目撃することに価値があるのだという事実報道の基本的な文法の1つが、ここに現れているといってよい。先に述べたような目的地点の陥落の瞬間をめざす形で報じられる戦争の「語り」や、こうした爆発の決定的瞬間を捉える「語り」は新聞報道の中心を担う「事実語り」の技法となっていく。それは「爆発」「沈没」そのものの「瞬間」こそが、戦争におい報じられる重要な「事実」として価値づけされていく過程でもあった。

3-3　経歴としての戦死者

戦死者を捉えようとする新聞の「語り」として、戦死者の「名」と「経歴」に注目していく記事が、新聞紙上に大量に出現するようになる。大体七～八行程度の記事に加え、顔のスケッチ画や、手紙や葉書の引用、また自筆そのものの印刷が記事に前後して報じられることもあった。例えばこうした「経歴記事」は、戦争を通じて戦死者報道の定型となっていく。下記の引用は、日露戦争“初”の戦死者への経歴記事のひとつである。

○三浦海軍中尉
正7位三浦容夫氏は茨城縣の出身なり、初め海軍兵學校に入り明治三十二年十二月十六日卒業して少尉候補生に命ぜられ同時に比叡乗組員となり實地に練習し三十四年一月十八日少尉に任じ呉鎮守府附に補し三十五年十月六日中尉に任じ富士乗組を命ぜられ今回出師の際山中少佐に代り富士分隊長心得を命ぜ

られ同時國家の為に身命を致せしも悲壮なり、享年三十歳左右と聞く。（M37/2/14）

「戦死者それぞれの固有の生をとらえようとしたもっとも小さな物語」、紅野謙介はこうした戦死者報道の頻出をそのように表現し、その背景に「数量化された死に対しうる固有名へのこだわり」があったのではないかと指摘する（紅野 2003:128）。ここで「数量化」された「死」とは、「近代戦」における「新たな戦場の人間像」の「発見」という事態と密接に関連していると考えてよい。

佐藤泉は日露戦争という「近代戦」において、それまでの「勇士」の表情の近接撮影風の視点とは異なる視点から可能となる戦場の記述が、その同時代のテキストに生じたことを指摘している。佐藤によればこうした視点とは、高所から戦場を捉えるような、人間を無意味なまでに縮減した点のようなものとして把握してしまう「知覚の場」として出現するという。「近代戦」は、「俵に詰めた大豆の一粒のごとく無意味に見える」（夏目漱石『趣味の遺伝』）といったような「死」を体験させるものとして現れたのである（佐藤 2002:68-91）。新聞報道にこうした「視点」が関わるとき、「●海戦死傷者　・・・即死三人　入院前死亡二人　運搬中死亡一人　在院二十人・・・」（東京朝日新聞 M37/3/21）といった「数」で把握される報道そのものが「自然なもの」として受け入れられてしまうだろう（戦死者を「数」によって報道することは、必ずしも「新聞報道」にとって必須の「事実」ではないにもかかわらず）。

こうした「数量化」による報道に対して、経歴からなる戦死者報道は「固有名」を回復させる最小限の物語として機能するだろう。「戦争の中で新聞はそれ以前に経験したことのない大量の死を報道しなければならなかった。戦争と並行する新聞の戦争に勝つためには死をめぐる言説を洗練させるしかない。だれもが自国の兵士の大量死を喜ばしく思わないからこそ、新聞はそれについて語らねばならない。」（中山 1994:31）新聞は近代戦の中の大量の戦死者を経歴という「事実」として「語り」だすのである。確かにこうした経歴記事に掲載される戦死者が、すでに選ばれた特権的な戦死者である限りにおいて、単純に「固有名」の回復と呼んでよいのかという批判はあるだろう。また最終的にすべての戦死者を経歴という普遍的な「語り」で捉えてしまうために、経歴記事は紅野の言葉を借りれば「ありきたり」で「類型的」なものになってしまうことを逃れられない。だがこうした経歴報道は、日露戦争においてその大量の「死」を最小限の固有性の中で捉えていく技法として成立していたことは否めないのである。

上記で論じてきた、「名」としての戦場／決定的瞬間としての戦場／経歴としての戦死者という新聞報道の技法は、それぞれ固有の「事実語り」として、戦争を把握していくものとして現れていた。それらはある特定の「事実」に価値を見出し、その集積によって戦争という出来事に「かたち」を与えていく。「迅速確実の報道」といった理念に対して、実際の新聞紙上ではこうした「語り」の技法が作動していたのである。ここで、こうしたそれぞれの「事実語り」の技法を、「事実」を“上手く”「まとめあげ」ていくための新聞の技法と指摘することが出来るだろう。それによって戦争という出来事は「事実」の集積として報じられることが可能となる。

だが一方で、当時の新聞において現れた戦死者をめぐるある報道記事は、そうした「事実」を“上手く”「まとめあげ」ていく新聞の技法に対して、その失調を露呈してしまう「語り」として現れていたようなのだ。「戦死者家族訪問」として現れた戦死者の逸聞報道は、同時代の新聞の「事実語り」の、微かな「混乱」を見せてしまう。

4　「逸聞」において報じられる戦争～まとまらない「事実」

戦死者を報じる新聞の「語り」は、単に経歴報道に留まらない。「新聞は戦死者たちの名をそれだけでは放っておかない」（紅野 2003：128）のである。戦死者へのさまざまな「事実語り」が新聞紙面に現れる中で、戦死者に親密に関係する人々を訪問し、その関係者から直接、談話を聞くといった形式に基づく「戦死者家族訪問記」は、「以後、戦争の全期間を通じて各紙とも遺家族訪問記事が社会面の大半をうめた」（朝日新聞社1970：450）とされる戦時報道の典型的な「語り」として現れたのであった。

明治37年2月14日大阪朝日新聞には「●名誉の戦死者」として「山中海軍少佐（幹）　三浦海軍中尉（容夫）外に海軍兵曹二名」の「名」が掲載され、「○名誉の戦死」欄に両名の「略歴」が22字7行の記事として掲載される。引き続き17日二面に「名誉の戦死者　富士分隊長心得　海軍中尉三浦容夫君」との見出しで肖像画が掲載される典型的な「経歴報道」に引き続き、17日九面に「●三浦中尉の夫人を問う」という見出しのもと、日露戦争における最初の「戦死者家族訪問記」が記載されたのであった。「君国の為に生命を鴻毛の軽きに到さんは、其身軍籍に在る者の抜く可からざる気概なれど」と口上的な表現に始まるその記事は、「今を盛りの花美しう、行末の幸福多かるべき望の身」であったはずの夫人綾子（十七年）を訪問するという点が強調され、次のように記述されていく。

記者は昨日午前綾子の實家なる北區野田今開町番外千二百五十二番屋敷山内一誠氏の邸を訪れたり、船

津橋を渡りて野田新道を西へ行くこと数丁、右へ曲がりて数丁右へ曲りて西成線野田驛の馬洗橋南詰東側の竹格子開けば、下女らしき人取次に出でて不審顔なり、来意を通ずれば主人一誠氏威容正しく出迎へられ奥の八畳に導かるると見れば北に面して小机あり、亡き人のそれかあらぬか、一葉の寫眞淋し氣に立てられたり、一誠氏は霜置く鼻下の髯を撫でながら語りだしつつ「ハイ、三浦も遂に戦死しました。御社の新聞に由つて、當時の模様は詳細にわかりましたが、餘りと言えば餘りの呆気無さ唯唯驚くの他ありません、綾子ですか、二女でして・・・結婚届けの如きも漸く制限の年齢に達して居たから、滞り無く出来ましたとはいふものの、思えば夢の様な感に堪へんです」(M37/2/14)

その談話者に直接会い、「肉声」を聴いたとするレトリックがこうした訪問記事ではまず強調される。経歴記事のように単に戦死(者)への言及から始まるのではなく、まず談話者を訪問する過程、次いでその談話者と会ったことが強調され、また時には談話者の容姿や表情への興味が記述され(これはその談話者が「実在」することを示すレトリックとしても機能するだろう)、そして最終的にその関係者による「私的な語り」のなかで戦死(者)に関するエピソードが言及されるのである[1]。

こうした訪問記事は関係者の「談話」に関心を寄せ、そこで語られる戦死者に関する思い出などに関心をよせながら、しかしその一方で周囲のさまざまな「事実」への興味・関心を増していくものになってしまうことに特徴がある。談話者を訪問するまでの道程、訪問口でのやり取り、探訪先の情景、父親の談話に続いて「談話中に一人の夫人が優婉に出で来る」が、その夫人は「髪を小さく束ね」「大きからぬ眼」といった過剰なレトリックのもとで、その表情・容姿が報じられていく。そして最後に、その夫人の談話が掲載される。「水戸から三浦の父が参りますはずで、横浜に嫁して居ます姉と一緒に、今日着飯の都合でございます。・・・」その語りは「戦死者」に対するものというよりも、夫人の私的な情報への興味に過剰に言及することになってしまう。

こうした特徴は多くの訪問記事に散見される。例えば「●故山中少佐の逸聞」(東京朝日新聞 M37/2/18)記事は、戦死した山中少佐の性行がかつて新聞紙上において記されていたことがあるにもかかわらず、その「逸聞」を聞くために妹に対面したことに言及する。妹という親密な関係者の「肉声」を聞くことが重要な「情報」となるのだ。さらにその冒頭は、訪問した妹の経歴をまず第一に報じてしまう。

「故海軍中佐山中幹氏の性行に就ては嘗て記す所ありしも兄弟六人中獨り郷里伊豫に在るは令妹静子なり静子は數年前同国温泉郡御幸村大字姫原愛媛県土木工手松山正氏に嫁し一男一女を擧ぐ今回少佐の訃報と共に伊豫日々新聞記者は静子に面して少佐の性行を聞きたる」。その後、山中少佐を巡る「逸聞」(少年時代は寡言、短慮だったが、後に温厚になった等)がこの記事において報じられていく。だがそうした「逸聞」を語る妹の「声」のなかに、突然、妹の「落涙」というレトリックが書き込まれてしまう。「・・・之が永の別れとならんと思はざりしと落涙し軍人の事なれば何時何んな事がないとも限らぬと豫て覚悟では居りましたが今となると丸で夢のやうでござりますと喞ちしは兄弟の情左もあるべし」。ここでも、その戦死者への「逸聞」が探訪の主要な関心とされながらも、その戦死者の妹の態度や発言に、一層の関心が向いてしまうのだ。

戦死者そのものの「固有性」を新聞メディアにおいて捉える「語り」の技法こそ経歴記事であった。こうした記事はどれほど類型化した「語り」であったとしても、戦死者そのものの「固有性」を捉えようとする最小限の記述として現れていた。一方こうした訪問記事も戦死者の「逸聞」を報じようとする点において、その戦死者の「固有性」を一層具体的なかたちで報じようと試みるものではあった。記者がその戦死者を知る関係者と出会い、その戦死者にかかわる談話を直接聴いたという「現場」を強調するレトリックが必要とされたのは、「逸聞」がその戦死者とどれほど「親密」であった関係者から得られたものなのか、ということを明示するためのものであったといえるからだ。「戦死者そのもの」をより一層、リアルな人物として捉えていく情報とは「親密な関係者」との談話において一層厚みを増していく(はずだ)とする、「インタビュー」の価値付けの「誕生」をここにみることもできるだろう。

だがこうした訪問記事は、戦死者そのものの「逸聞」への興味だけでなく、その訪問先への道程や、その談話者への興味・関心、その態度や容姿や表情、訪問先の家の内部といったさまざまな「事実」へと関心を拡げてしまう。それは戦死者そのものを捉えることから「逸脱」してしまっていくのだ[2]。こうした拡散する興味を示してしまう記事を「下世話」と言ってしまえば、そう捉えられてしまうかもしれない。とりわけ談話者としての女性に関する過剰なレトリック等はそう呼ばれても仕方がないものだ。しかしさまざまな「事実」への関心の拡がりが生じてしまうのは、訪問記事がまさに訪問記事の固有の「語り」として戦死者を捉えようとする試みの中で、どのような「事実」を「まとめあげ」ていくべきなのか、ということに「失敗」しているからである。逆に言えばこれは、訪問する過程で現れるさまざまな「事実」をどのようにして「まとめあげる」ことが、訪問記事(あるいは戦死者の逸聞として)の「語り」であるのか、ということが明確に制度化されずにいる状態を開示してしまっているのである。

日露戦争を通じて新聞は戦争という出来事を、

“上手く”「まとめあげ」ていくメディアとして成立していく。それは本論で言及した、「名」としての戦場／決定的瞬間としての戦場／経歴としての戦死者といった、戦場をある特定の「事実」によって「語り」だす技法等によって可能となるものであった。それに対してこうした訪問記事は、「まとまり」の“悪い”「語り」として“出現”していたのである。さまざまな「事実」へと開かれる可能性を持つために、戦死者そのものを語るはずの記事は、「下世話」とでも言いうるほどにその戦死者とは関係のない「事実」を「語り」だしてしまう。だがそうした訪問記事は逆に、新聞において“上手く”「まとめあげ」すぎる戦争の「語り」の「いかがわしさ」を垣間見せてもいるのである。言うなれば「逸聞」記事とは戦争という出来事を報じることの困難さを隠蔽してしまう新聞の“上手く”「まとめあげ」る「語り」に対して、その困難のありかを示すものとして現れていた「語り」でもあったのだ。

5　最後に

その〈全体〉を報じることなど不可能な戦争そのものを、「事実」を制度化する「語り」のもとで「理解」されるかたちへと変換し、さらにそれを「大々的活劇＝スペクタクル」として喧伝してしまうような新聞報道の在り方は、その同時代に既に次のように批判されるものとなっていた。

然るに新聞紙の材料は巧遅なるよりは拙速を重んじ、堂々たる大論文よりは新鮮なる零細の記事、深く考慮すべき含蓄ある説明よりは手取り早く呑込む事のできる記実、噛締めて益々味の出るものよりは舌の先で嘗めて直ぐ賞翫されるものが読者に受ける。新聞紙の寿命はただ1日であって、各項記事に対する読者の興味を持つはただ二分間か三分間である。(内田1909→1994:68)

「現代性(モダニティ)に対する批判の礎石」(スーザン・ソンタグ) ともいえるべきこの内田魯庵の新聞批判＝マスメディア批判の言葉は、しかし単なる新聞批判というよりも、むしろ2, 3分で読み捨てられてしまうものの内に、関心を引き止める途方もない言葉の集積こそが新聞報道として受容されていったものであることを逆に明らかにしてしまう。

マスメディア批評の多くは、戦争報道が、そして報道そのものがスペクタクルになってしまうことを批判し、ジャーナリズムという名のもとで正義と倫理の報道を追求しようとする。そしてその視点はメディアを語る「史」に対しても遡及的に言及されてしまう。しかし考えられなければならないのは、さまざまな情報と技法の交錯の中で、日々起こる出来事に「かたち」を与えていく行為こそが「報道」であり新聞が請け負ってしまった「メディア性」なのである、ということである。その途方もない「大々的活劇＝スペクタクル」を「語り」だす技法がこの明治30年代に出現したことこそを、私達は単なる既存の「ジャーナリズムへの批判」という形でなく、また既存のジャーナリズムに対抗する言説としての「真の報道ジャーナリズム」の位置から批判するのでもなく、それが「何であるのか？」「受け手はそれをどのように受容しているのか？」という地点から説明すべきものとして扱わなければならないはずなのだ。それこそがおそらくは日々流通する新聞をはじめとするマスメディアのスペクタクルを理解することになるのだし、またおそらくは現在の私達が日々受容しているマスメディアそのものへの理解へと結びつく端緒になるはずである。

註

(1) このような「私的な語り」は、「戦死者家族訪問記」に現れるだけでなく、この当時の“新しい”新聞表現として出現していた。1908年露西亜に向かう二葉亭四迷が、その社中で満鉄総裁後藤新平に、朝日新聞特派員の身分において「インタビュー」を試みた際、彼は次のように語っていたという。「新聞記者らしき態度にて大阪諸新聞の特派員ならびに二六の特派員等と倶に所謂 interview といふを致してみたけど」(池辺・富永1989:248) ここで明らかになるのは、談話を聴くことが「新聞記者らしい」役割として認識され始めたということである。また次の註にも関わるが、ブーアスティンは、こうしたインタビューこそをニュースの疑似形態として非難していた。

(2) ブーアスティンは『幻影の時代』において、こうしたインタビュー、そしてインタビューから逸脱するさまざまな出来事をニュースにしてしまうマスコミの語りの誕生を「ニュース製造」という技術に基づく「擬似イベント」として非難していた(Boorstin1962＝1964：15-53)。ブーアスティンによれば、それは「存在しない出来事」をニュースにしてしまう悪しき行為ということになる。しかし本論の帰結からすれば、ブーアスティンのいう「擬似イベント」こそがニュースそのものの本質をなしている、ということになるだろう。つまりニュースとは常に・既に「擬似イベント」なのであり、むしろ事件「そのもの」自体が既にマスコミ的「語り」の産物なのである。

引用文献(新聞の引用については本文中に記した)

朝日新聞社　1970　『朝日新聞社史　明治篇』
Boorstin　D　J. 1962　“The image”＝1964　星野郁美他訳『幻影の時代　マスコミが製造する事実』東京創元社
茶本繁正　1984　『戦争とジャーナリズム』　三十一書房
池辺一郎・富永健一　1989　『池辺三山　ジャーナリストの誕生』　みすず書房
金子明雄　1994　「メディアの中の死－「自然主義」と死をめぐる言説－」『文学』第5巻第3号　岩波書店
加藤裕治　2001　「「事実」を「制度」化するニュース－

明治期の二つの犯罪報道をめぐって―」『年報社会学論集』第13号　関東社会学会
北原糸子　1998『磐梯山噴火　災異から災害の科学へ』吉川弘文館
小森陽一　1994「変死への欲望－戦死報道と「軍神」神話の成立－」『文学』第５巻第３号　岩波書店
紅野謙介　1997「スキャンダル・ジャーナリズムと「法」の支配」－『万朝報』のある「姦通事件」記事について　小森陽一他編『メディア・表象・イデオロギー　－明治三十年代の文化研究』小沢書店
――――　2003『投機としての文学　活字・懸賞・メディア』新曜社
成田龍一　2001『〈歴史〉はいかに語られるか　1930年代「国民の物語」批判』NHKブックス
佐藤泉　2002『漱石　片付かない〈近代〉』NHKライブラリー
鈴木健二　1997『ナショナリズムとメディア　日本近代化過程における新聞の功罪』岩波書店
内田魯庵　1909→1994「二葉亭四迷の一生」紅野敏郎篇『思い出す人々』岩波文庫